

cinema punch

NPO法人水戸映画祭実行委員会シネマパンチ

NPO STYLE
vol.6

今回の取材先はNPO法人水戸映画祭実行委員会シネマパンチ。実行委員会とNPO法人、一見つながりのないような組織に聞こえるものをどうつながっているのか、？マークを頭に2〜3個くっつけながらの事務所訪問から始まった。

実行委員会 NPO法人…？

水戸女性会議のイベントとしての映画祭上映3作品のタイトルを眺め、いけてる映画選択に興味津々、こういう企画を出せるシネマパンチの事務局長伊藤和宏さんはどんな方だろう？

事務所とって思いつくがぶものは、乱雑に積み上げられた書類、パソコンやFAX等の機器に囲まれた机といったイメージだが、シネマパンチの事務所は入口からして異色、真っ赤なドアを開けて広がる空間は白を基調とした壁にオブジェのようにかけられた色彩豊かな着物で彩られていた。およそ事務所らしくない事務所、そこにまさにびっぴりたるの人物、事務局長の伊藤さんはひとりでいうと「生活臭のない人」。ある意味、この人のあるスペースはこれしかないという事務所でお話をうかがった。

「歴史ある」水戸映画祭実行委員会がどうして、N

PO法人を取得するに至ったかの疑問はとてもシンプルで力強いひとりで説明された、「好きな映画に関わりながら飯が食えるようになりたかった」。

なぜ、水戸なのか

中央へ行けば、先端の刺激に溢れているのはいつの時代も同じである。今も、政治経済・文化に限らず、何かを求めるなら、東京に行くのが一番はやい。その東京へ特急や高速を飛ばして簡単に行ける時間と距離の茨城・水戸はその近さゆえに、地方都市の存在意義をなかなか確立できない。映画も同じである。単館上映といわれる、いわゆるコアの映画好きな層が見る映画は東京近郊の上映期間が過ぎるまでは、地方では上映できない。ある程度茨城・水戸にもいるであろうコアの層は、ならば東京に見に行ってしまう、水戸へ配給になるのを待つてはくれない。そんな映画にとつて決断していい条件とはいえない、水戸であえて映画で食っていくことと思うには、地方都市でまちを考える人に共通の思いがあった。

夢みる力

永瀬正敏や浅野忠信が来県したことで今年初めて水戸短編映像祭のことを知った人も多かったのでは

ないだろうか？ビッグネームの俳優の力で「いわゆるお手伝いいただく」ボランティアにはことかかない。しかし、他のNPO法人や任意団体と同じように、「語りあえるスタッフ」はやはり豊富に、とはいえない。映画をめぐる地域的なハンデを持ち、それでも地方都市で映画で飯を食っていくこととするには、伊藤さん自身の夢が重なっている。「まちづくり」などに関わる人と同じ想いが見えてくる。

「東京でなくても、やればおもしろいことができることを証明して見せたかった」「今若い人たちに、自分のやりたいことと生業の重なる道すじを、地方都市で実現できるといふ夢を見せたかった」伊藤さんが語ると、地方都市の活性化、まちづくり事業などという言葉が生命をもって立ち上がってくるようだ。

NPOは新しいライフスタイルの実現でもある。伊藤さんを生活臭がないと感じたのは、次代のライフスタイルを時代に先んじて今身体ごと現しているからこそである。

【塩原慶子】